

絵に苦手意識を持つ子の問題が発達研究に提起するもの

企画・話題提供： 田中義和（桜花学園大学） 司会： 平沼博将（大阪電気通信大学）

話題提供： 脇志津子（京都・洛陽保育園）・浜谷直人（首都大学東京）

指定討論： 河崎道夫（高田短期大学）・山田真世（神戸大学大学院）

「絵に苦手意識を持つ子」にどう取り組むかは、よく保育者を悩ませる問題の一つである。その背景には多様な問題がかかわっているが、従来の描画発達論も「苦手意識をもつ子」を生み出す大きな要因となっている。従来の描画発達論は、写実性を軸に対象・経験と絵との対応関係を問題にして、描画を能動的な活動としてとらえる視点に欠けている。子どもたちに、生き生きと楽しい描画活動を保障していくために、描画発達研究に提起される課題について考えてみたい。

保育園での苦手な子への取り組み：脇 志津子

保育園で0・1歳児クラスの頃は、なぐり描きを楽しんでいた子が、2～5歳児クラスになると腕で絵を隠すことがある。子ども達の様子を見て、「自信がない」「かきたくない」というサインなのだと考える。

無理強いせずにその子が「かいてみようかな」と思える時まで待つのだが、ただその子が描きたいけれど描けないのか、描きたくないのか見極めることが大事である。苦手意識の原因を探ることで、それぞれにあった対応や援助がある。例えば、2～5歳児クラスでどう描いたらいいか困っている子には、何が描きたいのか、どんな風に描きたいのかを尋ね、友達のを一緒に見て「・・・ちゃんはこんなふうに描いてるね」とその描き方を紹介することもある。

絵画・造形活動で苦手意識を持たないように、また持った子への援助をどうしたら良いのか探っていきたい。

絵の苦手意識と生活画実践：浜谷 直人

幼児期の絵画製作では、運動会、遠足などの後で、それを絵にするという、いわゆる生活画と呼ばれる実践がひろく行われている。経験としての

運動会とは、その当日だけでも、開会式から始まり、多くの演目が続き、また、一つの演目においても、様々なシーンがあり、それぞれに出来事がある。演目とは関係ないこと（祖父母がきてくれたとか、昼に食べたお菓子が美味しかったとか）もあり、どれ一つとっても、時間経過において展開している。生活画とは、一つのシーンを形象化することではなく、それら経験全体の記憶をモチーフとして、描いている今の時点から、記憶経験を対象化して筋をつくり、印象的な形象を産出する作業（創造的模倣（リクール））であろう。また描きあげて、自分や先生や友だちの解釈を受けることで、運動会経験は新たな意味を獲得する。この報告では、生活画実践を例に取り上げ、子どもが絵を描くことができない（苦手になる）状況に迫ってみたい。

遊びとして見た描画活動：田中 義和

苦手意識を克服していくためには、描画活動の楽しさに注目する事が重要である。そこで、子どもたちの多様な描画活動を「遊び」としてとらえる視点を提案してみたい。描画を「遊び」として見る視点そのものは、新しいものではない。すでに描画発達研究の古典と言われるリュケ（1926）も描画活動を遊びとしている。しかし、描画を遊びとしてどうとらえるかは十分に展開されているとはいえない。

ここでは、カイヨワ（1967）などの遊び論に学びながら、描画活動を「楽しさを追求する活動」ととらえ、その楽しさを「生活体験などのイメージを展開する楽しさ」「写実性を追求する楽しさ」「色と形それ自体（配色やバランス・シンメトリーなど）の面白さの追求」などに分けて、さらに、描画発達をその楽しさの分化・統合されていくプロセスとしてとらえてみたい。